2000.12.15
第113号

編集・発行
福島県教育庁
会津教育事務所
峯島和彦

編集協力
北会津・耶麻・両沼
地教委連絡協議会
小・中学校長会

「出勤簿」

福島県教育庁会津教育事務所総務次長　薄葉義彦

「生き方は他に知らない出勤簿」

これは、私が二十年ほど前に、仕事でお付き合いをいただいた、ある著名な方から贈られた川柳である。

墨痕あざやかに、「○○様へ」と為書きまでしてある色紙を読んで、考えさせられた。

それは、人生経験の豊かなこの人が、意味のないことを書くわけがないと思ったからである。

その時、自分はどんな生き方をしていたのだろうか。その人の目には、自分がどんなふうに、写っていたのだろう。おそらく、遮眼帯をかけられて、前しか見えない競争馬、とでも思われたに相違ない。

そう指摘されてみれば、思い当たることは、いたるところにある。

自分可愛さのあまり、知らず知らずに、他人に辛く当たったことも多かったろうし、なによりも周囲のことにまで気を配るほどの余裕などなかった。

重箱の隅をつつくような仕事に精を出し、本来なすべきことの、本質を見失って、惰性でその日、その日を過ごしてきた。

そんな思いが強い。

そのような私を、その人は、鋭く見破っていたのだろう。だから皮肉を込めて、この句を詠んだ。

ある程度の経験も積み、一般的常識も、当然持ち合わせているものと自負していた自分にとって、難しい宿題を出された子供のような心境になってしまった。

この問に対する答えを探し出すことは、なかなか困難なことであろうし、また、人それぞれに異なるものだと思う。

この句は、その後の私の生き方に、少なからぬ影響を与えた。

独りよがりに陥ることなく、大所・高所から物事を判断し、どうすれば、周囲の人々が、幸せになれるのかを考えながら、事に当たる。

これが、長い期間を経て、私なりに、ようやく探し得た、答えの一つであるが、如何なものであろうか。

◇

もう残りが少なくなってしまった出勤簿。悔いのない日々を送りたいものと、念願しているこの頃である。

ふくしまの教育ライジングプラン

「基礎学力向上推進支援事業」（IDプランーII）の取り組み

平成十二年度の取組みへの五つの視点から、要請訪問等で接した各地区の実践概況と今後さらに目を向けたいことを述べます。各市町村や各学校での取組みを再考してみてください。

○IDプランーIIにおける自校プランを構築する

自校プランから学年・学級プラン、教科プランさらには個人プランへと改善したり、実践ポイントを絞ったより具体的なプランを作成したりする学校が多くなってきました。学期ごとに反省し、改善を加える等により日々の授業の充実に直結する無理のないプランにしたいものです。

○子どもの目線に立って実態を把握する

学力テスト結果や学校独自のアンケート結果を分析し、各学級の優れている点や問題点等の実態を明らかにする学校が増えています。結果から子ども個々の伸長の方策を探り、一人一人へのきめ細かな支援につなげていきたいところです。

○つまずきや力の高まりに応じたきめ細かな支援をする

T・T方式を生かしたコース選択型等の個に応じた学習形態の授業が増えてきました。T・T方式等を継続的に生かし、一人一人のよさをのばす実効ある支援に努めたいものです。また、日々の授業においても、指導内容のエッセンスを把握し、小技（子どもをひきつけ、授業を活性化させるその先生の様々な働きかけ）や生徒指導の機能を生かすことを大切にしたいものです。

○的確に対応する小・中学校の学習の接続を図る

すべての市町村で小・中学校合同の授業参観と事後研究会を実施しています。小・中学校の学習方法の連続性や学習内容の系統性へ具体的にどう対応するかが今後も問われています。

○課題や方向性の共有化を目指した諸会議をもつ

幼稚園や保育所、高等学校等も交えた会議を行っている市町村があり、組織の拡大が図られています。各学校が抱える課題を連携してどう解決するか等の具体的な協議が望まれます。

IDプランーⅡにおける小中学校の連携

湯川村立勝常小学校

IDプランーⅡの推進において本校では、左記のことに重点を置いて実践している。

○IDプランーⅡ推進のための教職員の共通理解と実践を図る。

○学年の発達段階や児童の実態にあった「学力向上勝常プラン」を学習内容の系統性を踏まえて作成する。

○現職教育を中心として、より効果的な指導法の究明や基礎学力の向上を図る。

また、現職教育では、国語科を中心に文章表現力を高めることを目指し、IDプランーⅡとの関連を図りながら研究を進めている。

特に小中の連携という視点においては、一人一人の教師が、学年間における基礎基本の関連性を意識して指導している。中でも六年生では中学校進学に向けて、次のことに取り組んでいる。

①新学習指導要領でも重視されている言語事項の繰り返し指導の計画的な実施

②中学校の学習に適応できるように調べ学習や問題解決学習などを取り入れた学習の推進

③中学校の学習指導要領を研究し系統性を押さえた指導の工夫

また、村基礎学力向上推進会議が中心となり村内各校の連携を図るとともに、要請訪問時には村内小中学校の全教員が授業を参観して協議を深めている。

今後、さらに中学校との連携を深め、児童が生き生きと学習に取り組んでいくことができるようにするために、次の課題解決に取り組んでいきたい。

①小中相互の授業に関する理解を深めるため、指導案作成において小中合同で取り組むこと

②児童が多様な学習方法に対応できるようにするための手だての工夫を図ること

IDプランーⅡの趣旨を十分に踏まえ児童の夢をかなえることができるようにしていきたい。

湯川村立湯川中学校

本村におけるIDプランーⅡの推進については、学力向上推進会議を中心に小中学校が連携を図りながら取り組んでいる。

本校においては、他の学校同様、学力検査等の諸検査の分析のもとに、自校の学力プランの改善を図り授業の質的改善を図っているが特に、IDプランーⅡにおける取り組みにおいては加配教員等の活用により、T・Tの授業を実施する中で、個に応じた指導の充実を図り効果を上げている。

小中の連携という点において本年度は、国語科をメインにした授業研究会を各学校で実施し、その都度村内の先生方が参観できるように配慮し、研究協議会においても教科の本質にせまる積極的な意見交換もなされている。

本村では、小中学校が近くに立地しており、お互いに情報交換を含め交流し易い面があるが、実際的には、年間数回の各校の授業研究会開催にとどまってしまっている。また、児童生徒の姿に目を向けてみると、小さい集団で小学校時代を過ごし切磋琢磨する場面に乏しいためか、特に、小中の接点となる一年生において、生徒相互の人間関係の不調が学習面の向上を妨げている面がある。従って、小学校で得た基礎学力をスムーズに伸ばせない等の課題がある。

このような現状から、今後、普段の授業等における教師同士の参観はもとより、児童生徒の直接的な授業・活動における交流（小学校高学年同士並びに中学校一年生）が実施できればと考える。また、年度末の小中の事務引継ぎ等でも、一人ひとりの継続的学習指導に役立ち学びの足跡が明確にできるカリキュラムの確立の方法についても模索していきたいと考える。

IDプランーⅡにおける授業実践の成果と課題

磐梯町立磐梯第一小学校

本校では、町の基礎学力向上推進支援事業計画を受けて、国語科における「話す・聞く力を育てる指導」を校内の研究主題として、主に次の三点を研究実践の柱として授業の改善に取り組んでいる。

①「話すこと・聞くこと」についての教材の工夫

②「よりよく話す」「よりよく聞く」指導の工夫

③「話す・聞く」場の設定の工夫

これらの中で、②③については、各学級の実態に応じて各担任が実践計画を立て、授業の中における指導を積み重ねている。また、本校の基礎学力向上を図る一日の計画に沿って、表現活動集会・いきいきタイム・ショートスピーチ等に全校で取り組んでいる。①については、「教科書教材の活用」「発展的なものとしての教材化」「新しい教材開発」の三つに重点をおき、授業研究を行なっている。

町内の小中学校授業相互参観では、児童の実態に合わせて言語活動について教材開発したものを教材として取り上げた授業を提供した。授業では、よい話し方について考え、自分の思いや考えを相手を意識して話すことをねらいに、小グループで相手の顔を見ながら自分の好きな本の紹介をした。

話すことに自信がなく消極的だった子どもたちがグループ内でしっかり話している姿が見られ、活動経験の広がりにつながった。

日々の指導の中で教師が「話すこと・聞くこと」の指導への意識を高めてきたこと、新学習指導要領の「話すこと・聞くこと」の領域について取り立てた指導を積み重ねてきたことにより、児童一人一人が少しずつよりよく話せるように、また、よりよく聞けるようになってきていると感じられる。

さらに、実践を積み重ね、個に応じた指導を充実させ、基礎学力向上に努めていきたい。

総合的な学習の時間の取組み

総合的な学習の時間における保護者や地域との連携

喜多方市立慶徳小学校

本校では、今年度より「身近な地域を調べる体験活動を通して、主体的な学習に取り組む児童の育成」研究主題に掲げて、「総合的な学習の時間」の研究に取り組んできた。

「ふるさとウオッチング！慶徳町のひみつをさぐろう！」の基本テーマのもと、身近な地域の自然環境や文化財、産業などに視点を当て、各学年ごとのテーマを決めて取り組むことにした。

そこで、まず、年度当初の保護者会に於いて本校の「総合的な学習の時間」の推進について説明し、子どもたちが地域に出掛け学習すること、課題の解決の中で、地域の先生としてご指導いただくことがあることなど協力を要請した。

さらに、学級通信や学校だよりの中で、「総合的な学習の時間」の推進状況をお知らせしてきた。

【地域の人材を活用した事例】

三学年の研究テーマは、「くらしウオッチング」である。慶徳町の農家の主な生産物であるぶどう、アスパラ、りんご作りに目を向け、グループごとに農家に出掛け地域の先生から説明を受けながら調査した。また、地区の伝統ある「お田植え祭」を見学し、そこに参加している人々にアンケートを取りながら調べてきた。

これらをまとめる段階では、農家の方々や祭りに詳しい方をゲストティーチャーとして招き、それぞれのグループの中に入っていただき、児童の疑問に答えたり、足りない部分を補っていただいたりした。その際、教師は事前に、ゲストティーチャーと授業のどの部分でどんな助言をするか打ち合せを持って臨むことにした。

その結果、児童が主体となりながらも適切なアドバイスをゲストティーチャーに受けながらまとめることができた。

他の学年でも、バードウオッチングに詳しい方、JAの営農指導員の方、地域の歴史に詳しい方々などの協力を得ながら実践しているところである。

十二月の学習発表会では、保護者やお世話になった地域の人々を招待し、各学年の総合的な学習の時間に調べたりまとめたりしたことの発表が予定されている。参観者の方々の感想や意見などを参考にしながら、今後も、保護者と地域の方々との連携を図りながらさらに「総合的な学習の時間」に取り組んでいきたい。

ゲストティーチャーを招いた学習

学校や地域の特色を生かした総合的な学習の時間の推進

会津本郷町立本郷第一小学校

本校は、東側に白鳳山が広がりその横を大川が流れるというすばらしい自然環境のもと、十八の窯元を持つ「せともの里」の中心地に位置する。

本校では、このような地域環境を生かし、「学校や地域の特色を生かした総合的な学習の時間の推進」に取り組んでいる。

一、せせらぎタイム

総合的な学習の時間を「せせらぎタイム」と呼び、地域の特性を生かして、自ら学び、自ら考える力などの生きる力を育み、学び方や物の考え方を身につけ、問題を解決する力を育てることをねらっている。また、各学年では、子どもの思いや願いを軸に、次のようなテーマを設定した。

六年―ボランティアを学ぼう
五年―本郷町の伝統工業
四年―水と私たちの暮らし
三年―白鳳山探検たい

二、協力者名簿の作成（三年）

地域の専門的知識を持った人や保護者の方々に協力いただける内容等についてのアンケートを実施し、それをもとに協力者名簿を作成した。いろいろな人々との関わりにより、子どもたちは、多くの体験をし、そこからいろいろな「発見・驚き・興奮」が生まれた。

三、活動の実際

○　三年「白鳳山探検たい」

子どもたちの願いにより、昆虫コース、鳥コース、木のコース、草花コース、生き物コースの五コースに分かれて探検を行った。この際、協力者名簿によりゲストティーチャーとして保護者の方に一緒に探検をしていただいた。活動後、「○○先生ありがとうございました。鳥のことがよく分かりましたので家族みんなに教えてあげたいです。」と、ゲストティーチャーに感動を伝えていた。

四、終わりに（地域の願い）

ゲストティーチャーの返事などから地域の人々も学校や子どもからの働きかけを待ち望んでいることがうかがえた。また、子どもたちは、自然に地域の方々を○○先生と呼び、一緒に活動することによって、より積極的に人との関わりが持てるようになってきた。

今後、さらにいろいろな分野で相互交流ができるように、あせらずに子どもたちを支援していきたい。

高校教育課より

駐在日記…ある日のバトル

高等学校教育課会津駐在管理主事　古関隆史

○月△△日　高校入試について中学校側と高校側の考え方の違いについて興味深いバトルが展開された。

過日行われたある協議会の折りである。その一つは、入試に臨む中学校側の指導の在り方についてであった。例えば、推薦入試に小論文が課せられた場合、高校側としてはそれなりの準備をして力をつけて臨んでほしい、と一般には希望している。中学生には興味関心が薄いと思われる評論文なども読み込む時間を十分にとってほしいと思う。そして、その要約や論点の分析、自分なりの意見を述べるなどの練習をしてきてほしいと願う。

これに対して、中学校側は生徒の読書量が少ないことを嘆きつつ評論文よりも情操を豊かにすべく文学書も大いに読ませたい、と考える。更に、小論文のテクニックをマスターさせるよりも、小中学校九年間の集大成を評価してもらえれば良い、と提言する。

どちらに軍配を挙げるかではない。どちらにも理があり、双方を生かす知恵と努力が、組織の上でも、学校現場・教育行政の施策上も必要であろう。

今、自分の進路達成に精魂傾けて青春を生き抜いている生徒たちに中・高連携の実りを捧げたい。

☆月△△日　昭和四四年に現在の七教育事務所になってから、会津の駐在は、指導が一二名、管理が一三名、小・中・高との絆を求めて三一年である。よりよい教育環境を探求して邁進を続けたい。

私の実践

地域自然の教材化の試み

西会津町立野沢小学校　佐藤智子

「なぜ、山に貝があるのだろう。」

「蓮痕（波または水流の運動によって印された波状の痕）は、何年かかって峠まで押し上げられてきたのだろう。」

「どうして火山灰が、豆のように丸くなるのか。」

これらは、西会津町の軽沢峠で地層と化石の野外学習を行ったときに、子どもたちから出された疑問です。野外学習では、自分から積極的に地層調べに取り組む子どもたちの姿が、たくさん見られます。私は、この魅力ある地域自然に、私自身が心をひかれながら、教材化に取り組んできました。

軽沢峠付近の地層の最大の特色は、『会津最後の海』の時代から『湖』の時代にかけての地層が、ほぼ連続的に露頭として観察できることです。片道五百メートルほどの短いコースで、海から湖への大地の動きや変化を実感できるような場所は、全国的にみてもまれです。また、現在海に接していない会津の山の中から、貝やウニや魚の化石が見つかるという事実は、子どもたちの興味関心をおおいに揺さぶります。

これらの特色をふまえて、野外学習では次の二点を心がけて、支援してきました。

①自分で地層にふれたり、化石を採集したりする活動の時間を十分に確保する。

②軽沢峠付近の地層や化石に関する資料の充実を図る。

傾いた地層で化石採集をする子どもたち

①については、交通手段として町マイクロバスを利用し、移動を含めて一～四校時に野外学習を計画することで、子どもたちの活動時間を確保することができました。

②については、地質学の研究者や高郷村郷土資料館等と協力して、子ども向けのテキストや化石カード作りをすすめてきました。また、本校のウェブページの中に「地層と化石」のコーナーを作り、授業に活用してきました。

今秋、野外学習や高郷村郷土資料館の見学に、二十の小・中学校が高郷村を訪れたそうです（高郷村公民館資料より）。今後は、地域資料の共有化や小・中の理科学習の連携などに視点をおいて、実践に取り組みたいと思います。

地域に学ぶ

鮭立の磨崖仏

金山町教育委員会主査　大竹有香

金山町の山麓には、数多くの自然の洞窟ができています。鮭立地区にも山麓に洞窟があり、その内部の壁面に数多くの仏像が浮彫りにされています。これが町の重要文化財の『鮭立の磨崖仏』です。鮭立地区の磨崖仏は、国道二五二号線の横田より山入川に沿って約五㎞さかのぼったところの石田山の麓にあります。全面の幅が約五メートル、高さ二メートル、奥行は浅く、僅か一・五メートル程度の洞窟の壁面に彫刻されたもので、規模は小さいですが、そこには五十数体の大小さまざまな仏像が彫まれています。最大の仏像でも高さが六十一センチにすぎません。仏像といっても、仏（如来）や菩薩の姿は見られず、不動明王が最も多く、明王や天部の像が占めています。これが、当磨崖仏の特徴です。

さて、ほとんどの仏像には、顔料をもって美麗に着色した跡がありますから、造像の当時は見事なものであったに相違ありませんが、今は僅かに荘厳の痕跡をとどめているにすぎません。また、短日月に制作されたものではなく、向かって右方が古く、左方に移るにしたがって新しいことが、磨滅の程度によってわかります。制作年代も記録がありませんので、あくまでも推定の域を脱しませんが、おそらく天明から、文化・文政・天保の各時代にかけ、数代に亘っての作であろうと考えられます。

天明の凶作には多くの人が餓死しましたし、文政期には大水害、天保期には再び凶作に見舞われ、人々は生きた心地もなかったのです。由来、造像あるいは写経は、それだけで大きな功徳になるとされていますから、災害の退散と村の平安を祈る切なる心から、造像に精進したもので、それが今に残る鮭立の磨崖仏だと伝えられています。

毎年十一月に、鮭立地区の方々は、『磨崖仏まつり』というものを行い、仏像に参拝し、秋の収穫に感謝するとともに、こういった祖先が残してくれた重要な文化財（たからもの）を守り伝えていこうとしています。私たちは、まずこういった宝物に関心を持つことが一番大切なことだと思い、文化財巡りなどの各種事業を展開しております。

鮭立地区　磨崖仏まつり

教育相談

小さな変化の大きな意味

学校教育相談員　山内　昇

子どもが学校に行きたくないと言い出したとき、大方の親は突然の出来事ととらえて、その理由を聞き出そうとするが、明白な説明が得られず、さしあたり、学校を休むことだけは阻止しようと躍起になるという例は少なくない。

しかし、この対応がその後の学校復帰を一層困難にしている。

実は、本人もその根拠を特定できずに悩んでいることが多い。

というのは、長時間にわたり、いくつもの要因が複合して精神的にダメージを受けた結果の訴えであることが多いからである。

また、「いじめ」のように原因がはっきりしていても、苦しさを明かせないで、精神的に追い込まれることもある。この場合も本人から早期に情報が得られることは稀であり、子どもたちの悩みや苦しみの情報は、かなり深刻な状態に至るまで親や教師にもたらされない場合が殆どである。

事後に経過を辿ってみると、気付きにくい程度の叫びを発していたことに思い当たることが多い。

小さな変化に気付いてやれるかどうかによって、その子の人生に大きな影響を与えかねないと考えて、親も教師も大きな仕事がそこにあることを意識し、気付きの実践者を自負したいものである。

特色ある学校紹介

地域と一体となった道徳教育を目指して

会津若松市立第六中学校

本学区（永和小・神指小・若松六中）は、平成十年度から三年間、文部省より「道徳的実践活動地区」の指定を受け、学校・家庭・地域が一体となった道徳教育の推進を図るため、研究に取り組んできました。実践にあたっては、学校道徳推進委員会を設置し、その企画や提言・支援・協力のもとに、あいさつ運動、地域クリーン活動、三校で合同の授業研究会の実施、広報誌『ふれあい』の発行、といった内容について取り組みました。

【あいさつ運動】では、区長会を通した各地区・各家庭への「あいさつ運動」の展開の呼びかけ、青少年育成推進協議会によるあいさつ運動の標語の作成などが行われました。

【地域クリーン活動】は、児童・生徒が中心となって活動計画をつくり、学校道徳推進委員会を通じて、区長さんから各地区の方々へ、学校からは保護者へと広く参加を呼びかけ、地域ぐるみの活動となるよう、はたらきかけを行いました。

【三校合同の授業研究会】では、「心に響く授業」「体験を生かした授業」「保護者や地域との連携を目指した授業」を授業づくりの方針とし、授業参観はもちろん、授業後の検討会にも、保護者・地域の方々に入っていただき、教職員とともに、今後の道徳教育の在り方を考えました。

【広報誌『ふれあい』】は、区長会の協力の下、学区内全家庭への配布を行いました。

このような実践の結果、「あいさつがよくできるようになってきた」「地域の一員としての自覚が芽生えた」「地域をあげて子供を育てようとする意欲づけができた」などの成果がありました。そして何より、学校道徳推進委員会において、生徒の道徳性に関わる諸問題の情報交換をし、その課題解決に向けた実践活動を協力して行えたことが大きな収穫でした。一方、「日常の指導に生かせるように、学校道徳推進委員会を核とした地域ぐるみの取り組みの継続を図る」「より一層広報活動を充実し、子供のいない家庭への啓発を図る」などの課題も残ります。今後は、こういった課題の解決に向け、取り組んで行きたいと考えています。

地域の方々とともに行ったクリーン活動

三年目のつぶやき

昭和村派遣社会教育主事　鈴木力雄

派遣三年目の秋が終わりを告げ、ここ昭和村では落葉のさざ波が舞う中で長い冬の到来を静かに待っている。全くの思い込みかもしれないが今年の紅葉が一番美しく輝いていた気がする。

村の長老たちは昔はもっともっときれいな紅葉が見れたのにと懐かしんでいる。しかし、言葉とは裏腹に、おらが村の曼荼羅模様を自慢げに眺む姿は、自然の恵みや厳しさと共存してきた誇りをよそ者の私にも十分に感じさせてくれる。

派遣社会教育主事という仕事は、学校現場を離れ教員とは異なる立場で気苦労も多かろうと心配してくださる方々にたくさんお会いした。皆一様に温かく見守りながら、そっと手を差し伸べてくださる心配りには感謝の気持ちで一杯である。

考えてみるとわたしたち教職員は基本的には様々な市町村への派遣の人生であり、それが宿命であると思う。中でもわたしたちの立場は、対象が児童生徒のみならず様々な世代の方々と夢や願いを直接的に共有しながら各種事業を計画したりすることができるのだから、実に恵まれた環境におかれているのだと思う。

老若男女がそれぞれの生きがいづくりのために、自分を見つめ、地域を見つめ、各種活動に積極的に参加したり指導したりしている姿に出会うたびに、学校という枠組みの外でも『一生勉強』の精神が脈々と豊かに息づいていることに驚かされる。我が身に照らせばただただ感嘆と自戒の思いである。

特に高齢者の方々は「動く博物館」「動く百科事典」と称しても決して大袈裟でないほどの知恵を持っており、まさに生きる力そのものである。これは現代社会において便利という名の下に疎かにされがちになってしまった自然との共生に、常に真剣に対峙してきた体験的な積み重ねが身につけさせてくれたものだろうと思う。

それらのすばらしい力を新学習指導要領における『総合的な学習の時間』にも大いに発揮していただくことにより、さらに充実した活動が進められるものと身をもって感じ取ることができた。また、この力が『開かれた学校』の構築と重なり合い、大きな変革の時期を迎えている学校教育を力強く支えてくれることは間違いないと思う。

地域の教育力は生きている。

私の抱負

実践の日々

北塩原村立大塩小学校
校長　佐瀬　千代子

「家庭・地域との強い絆を保ち児童が生き生きする学校にしたい。」と心から願っての出発だった。

児童数五十八名。一人一人の個性がキラリと輝く。職員は熱意を持って日々の教育にあたり、児童全員が主役の毎日は、児童にやる気をもたらしている。

「将来一人でも多く、村に残って欲しい。」との地域の熱き願いを受け、全職員と共に地域との絆を深めながら、「大塩のよさ」を追究できる地域に根差した教材の開発に今、真剣に取り組んでいる。

それぞれの花を

猪苗代町立前島小学校
教頭　小関　れい子

二十代の頃、インドで出会ったアニーという女の子が私の心に焼き付いている。学校にも行けない貧しい生活にあっても、瞳は輝き、オーラを感じさせた。まるで一つの赤い花のように。

今、子どもも大人も、多様で複雑化した社会の中で先行き不透明な不安と葛藤を抱えているように思える。

アニーのように、それぞれが、自分なりの美しい花を咲かせて欲しいと願う。そのために、自分の役割の中で精一杯支援していきたい。

私の進む道

新鶴村立新鶴中学校
教諭　星　有為

七月二十五日、福島体育館の監督席に私は、座っていた。

柔道の選手として幾度となく出場してきた県大会であったが、顧問としては、初めての経験であった。

試合前、生徒が私を必要としてくれた。「自信を持ってやれ。」一声かけてやる。生徒の勝利した顔、敗北した顔、沢山の表情を目の当たりにし、今まで味わった事のない大きな感動を得ることができた。

この感動を忘れず、新たに踏み出した教師の道を、一歩一歩、進んでいきたい。

心に残る人々

塩川町教育委員会教育長　物江　清光

世間を知らない若輩のころ教えを請うた諸先輩をはじめ、数多くの先生方とのかけがえのない出会いがあり、感謝しています。

直接お仕えし、能力以上のことまで引き出していただいた校長先生方は、悠々閑々、泰然として事に当たっておられ、また、ご高齢になられてからも、なおかくしゃくとしておられました。

九十歳を超して、長寿を全うした祖父が二人いました。高齢になるまで、一人は人との関わりをもって社会に出、また、もう一人は、農作業や自然からの恵みを得るために寸暇を惜しんで野山で体を動かしておりました。

生活の場、社会活動の場の広さの違いはありましたが、お仕えした校長先生方も祖父も、自らを律することの厳しさとともに心のあるがままに、自然体での生き方であったと今にして思われます。

若いころご薫陶をいただいた先達の年齢を、既に超しています。泰然自若とまではいかないまでも、心に無理のない勤めをと願っています。

作品と指導

絵

ザリガニとあそんだよ

山都町立山都第一小学校
二年　佐藤　孝徳

〈指導の工夫〉

クラスで飼っていたザリガニとお別れする前に、絵に描いてあげようということで取り組ませた。

はさみや足の様子、動きなどよく見てわりばしペンで描かせた。ザリガニの質感が出るよう、筆使いに気をつけて彩色させた。

大きく躍動感のあるザリガニが印象的な作品である。一生懸命世話した孝徳君の思いも表れている。

指導者　佐藤　典子

絵

くしゃくしゃ紙から

昭和村立昭和小学校
一年　菅家　奈都見

〈指導の工夫〉

自分の好きな紙をくしゃくしゃにして、自由に手でちぎらせた。そして、気にいった形を紙に貼らせ、まわりの様子をかき足したり他の紙を貼ったりしてお話を絵に表現させた。

手でびりびりちぎるのを楽しんでいた奈都見さん。ちぎった形がペンギンに見え、想像を広げていき、かわいらしい作品になった。

指導者　小林　未知子
小澤　有合子

習字

挑戦

猪苗代町立猪苗代中学校
三年　星　佳代

〈指導の工夫〉

「書は人なり」という言葉があるが、今回の作品はまさにその作者の人柄通り、大変素直である。

また字形も、手本に対して忠実に書いている。「書写」教育の正しく整った字を速く書くというねらいに対して合致している。

今後、さらに向上心を持って取り組めば、今以上の作品ができると思われる。

指導者　海野　浩